

「情報を伝える力」に培う授業の創造

— 「表現・コミュニケーション力」の育成を目指して—

三宅将巳・杉野清隆・山元隆春*

Japanese Class in Junior High School

— Through the Chapter Bringing up Students' Ability for Communicating —

Masami MIYAKE, Kiyotaka SUGINO, and Takaharu YAMAMOTO

Abstract. The purpose of this research is to study the creation of Japanese language teaching bringing up students' ability of self-expression and communication. To make students have zest for communicating, we tried to motivate students to communicate. In this paper, we describe how we teach the seventh and ninth grade students.

Key words: ability of communicate, zest for communicating

I. はじめに

新学習指導要領に基づく新しい教育課程の中で、国語科においては「伝え合う力の育成」を柱とした改善が行われた。これまでの、文学的な文章教材を中心とする詳細な読解指導の傾向が強いことへの反省や、言葉の力を通して円滑な人間関係を築くことなどをねらいとするものであると考える。

本校国語科では、国語科における「基礎・基本」として「情報化社会を主体的に生きていくための力」を重視し、特に「情報を読む力」に培う授業の創造に取り組んできた。本年度は、引き続き「情報を読む力」の育成を基盤にすえながらも、さらに「情報を伝える力」に焦点をあてた授業を構想することを目的として、研究・実践について考察することを目的とする。

II. 本校研究主題との関連

本校では、2000年度から「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造」という研究主題を設定し、取り組んでいる。本年度は、特に「表現・コミュニケーション力」の育成を目指している。本校では「表現・コミュニケーション力」を「自分の知覚・感情・意志を、相手の状況や社会的立場に応じて適切な媒体を用いて、効果的に伝える力」と定義した。現代の高度に発達した情報化社会においては、様々な新しいメディアが誕生し、映像や音楽などの非言語を媒介とする「表現・コミュニケーション」に触れる機会は今後も増加する傾向にあるだろう。しかしながら、言語を媒介とした「表現・コミュニケーション」の力はコミュニケーションを支える基礎・基本的な力として、その重要性が変わることはないであろう。「表現・

* 広島大学大学院教育学研究科助教授

コミュニケーション力」を育成していく上で、国語科の担うところは大きい。

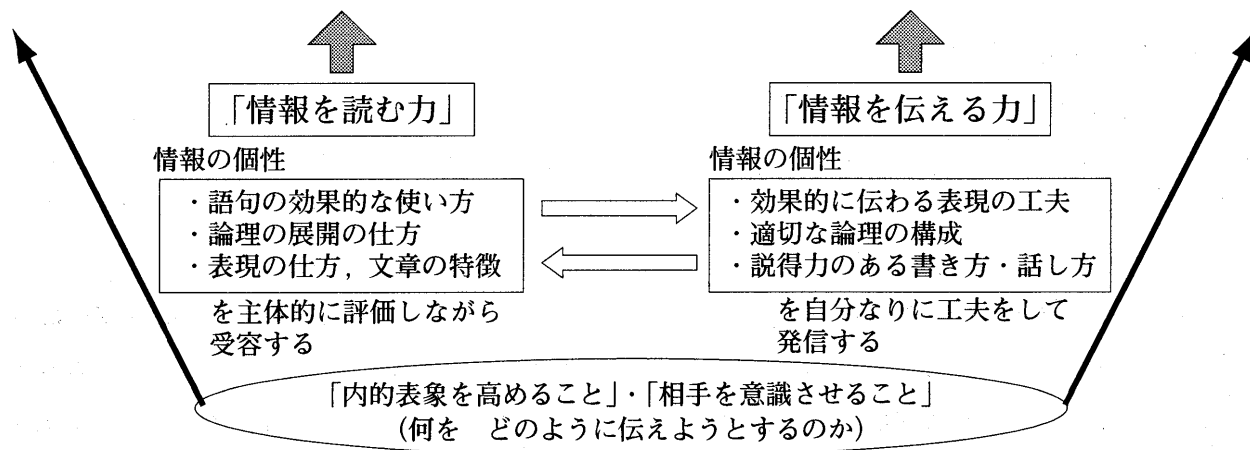
本校では、「表現・コミュニケーション力」を育てるための手だてとして、「内的表象を高めること」「相手を意識させること」の2点に着目した。「内的表象を高めること」については、まず国語科としての基礎・基本を定着させることが重要であると考えている。その基礎・基本を土台として、主体的に学ぶ意欲を高める指導のあり方について工夫していく必要がある。「相手を意識させること」については、コミュニケーションにおいて、効果的に伝える力を培うためには欠くことのできない要素であり、国語科の各領域の内容、目標と一致するものである。

Ⅲ. 研究の方向性

先に述べたように、これまで本校国語科では、国語科における「基礎・基本」として「情報化社会を主体的に生きていくための力」を重視し、特に「情報を読む力」に培う授業の創造に取り組んできた。

「情報を読む力」とは、「情報の内容」をとらえるのみでなく、「情報の個性」をとらえ、その情報を主体的に評価する力であると考えている。それは、情報の発信者が「何を どのように伝えようとするのか」、その意図や工夫をくみ取りながら主体的に受け止めることである。この場合、発信者の「意図や工夫」について考えることは、発信者が自己の「内的表象」を「相手をどう意識して」発信しているのかを考えることに他ならない。また、このことを発信の場面に置き換えれば、「何を どのように伝えるのか」、すなわち自己の「内的表象」を「相手を意識した」上で、効果的に伝わるよう「工夫をした」情報として発信することが重要であるといえるであろう。そのような場面で働く力を、「情報を伝える力」と考える。つまりは、これまで取り組んできた「情報を読む力」と、「情報を伝える力」は個々に別々に働く力ではなく、情報を発信する場面と、受容する場面のそれぞれの視点から捉えたものである。言い換えれば、「情報を読む力」を育てることが、「情報を伝える力」の育成につながり、またその力が「情報を読む力」にも返ってくる、というように相互に関連し往復しながら育っていく力であると考えている。(図1) そのような考え方を基本にして、今後、「情報を読む力」と「情報を伝える力」をどのように育てていくか、その指導のあり方について考えていきたい。

図1 「情報を読む力」と「情報を伝える力」



Ⅳ. 具体的な授業計画及び実践

1 第1学年での取り組み

(1) 単元 暮らしを見つめる

(2) 単元設定の理由

「魚を育てる森」、『めぐる輪』の中で生きる」はともに光村図書国語1年の「暮らしを見つめる」という単元に採録されている文章である。前者は、海と植物の関係を題材とし、微妙な自然界のバランスについて問題提起したものであり、後者はごみに視点をあて、自然界との関係・循環の重要性について考えさせる文章である。両者はともに、「人間と人間を含めた自然とのつながり」について問題を提起しており、生徒たちが自らの「暮らしを見つめる」契機となる教材であると考えている。

本単元では、「魚を育てる森」『めぐる輪』の中で生きる」の二つの教材を出発点とし、さらに、関連したテーマをもつ他の資料を加えた学習を展開したい。まず、両者の共通するテーマである「人間と人間を含めた自然とのつながり」について捉えさせたい。その上で、教師側で用意したいいくつかの資料をとりあげ、テーマや筆者の表現の仕方の個性について関連づけて考えさせたい。それまでの学習の成果に、他の教材を関連づけることによって、新しい発見や考えの深まりを得ることができると考える。さらには、そのような学習を通して学んだことを、他者に対する新たな情報として発信する場面を設定したいと考える。それらの活動を通して、「情報を読む力」「情報を伝える力」の育成を目指したいと考えている。

(3) 指導目標

- ①筆者の主張を読みとり、私たちをとりまく「自然とのつながり」について考えを深めることができるようにする。
- ②他の資料と関連づけて考えさせることで、それぞれの「情報を伝える」際に表れる個性について評価できるようにする。
- ③新しい発見や考えの深まりを伝え合うことができるようにする。

(4) 指導計画

- ①二つの文章における筆者の主張を読みとらせる…………… 8時間
- ②関連したテーマをもつ他の資料を読み、テーマや筆者の個性に関して意見交流をさせる… 4時間

(5) 学習指導過程

学 習 過 程	活 動 内 容	指 導 上 の 留 意 点
「魚を育てる森」を読み、筆者の主張を捉える。 (4時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・「題名読み」をし、読みの構えをつくる。 ・初発の感想・気づきなどをまとめる。 ・難語句の意味を確認する。 ・筆者の述べ方にしたがって、主張と論理を読み取る。 ・文章全体の構造をつかむ。 ・筆者の述べ方の工夫と問題点について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に考えさせ、ワークシートに記入させる。 ・「開拓農民、回遊魚、森林起源、魚介類、活着、肝に銘じる」など ・問題提起とそれに対する説明・答えの関係を押さえる。

<p>「『めぐる輪』の中で生きる」を読み、筆者の主張を捉える。 (3時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「題名読み」をし、読みの構えをつくる。 ・初発の感想・気づきなどをまとめる。 ・難語句の意味を確認する。 ・筆者の述べ方にしたがって、主張と論理を読み取る。 ・文章全体の構造をつかむ。 ・筆者の述べ方の工夫と問題点について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に考えさせ、ワークシートに記入させる。 ・「はぐくむ、一環、根底」 ・前半部・後半部の要旨、具体例 ・段落「『本当の地球』の中で生きることを学ぶ絶好の機会」とはなんだろう。 ・「めぐる輪」の意味を捉えさせる。
<p>両者のテーマの共通性や、述べ方の違いについて、考える。 (1時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・両者の主張、そのための根拠としてあげている事柄、述べ方を比較する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・両者のテーマの共通性について気づかせるようにする。 ・両者に対する感じ方の違いがなぜ生じたのか、整理させる。
<p>「おーい、でてこーい」を読み、作者の意図、テーマについて考える。「『めぐる輪』の中で生きる」と比較しながら考える。(2時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・両者の共通する点について考える。 ・感じ方の違いとその理由について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「おーい、でてこーい」の主題や意図について、考えさせる。 ・両者に対する感じ方の違いについて整理させる。 ・「穴」は何を表しているのか、それは「『めぐる輪』の中で生きる」ではどう表されているのか、考えさせたい。
<p>テーマについて、考えたことを発表し、意見交流をする。 (2時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・三つの文章のつながりをふまえた上で、自分の考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章として、まとめさせる。 ・班で交流をさせる。

(6) 授業実践の例 (第4時)

○本時のねらい 筆者の論理の問題点に気づき、自分なりに改善することができる。

○授業の概要

この時間では、「魚を育てる森」⑥段落にある二つ目の問題提起と、その答えとの関係について考えさせた。この文章では、⑥～⑭段落で、およそ次のように述べられている。

問題提起2 ⑥ 森は、海にとってどのような役割を果たしているのだろうか。

説明⑦段落～⑬段落

⑧湿った腐植土は雨水を地中に保ち、適量を地下水として流し続ける役割を果たしている。

⑩森は土を陸地につなぎ留めることで、海の生物を守る役割ももっているのである。

⑪そのうえ、腐植土そのものには、海の生物を育てる大事な役割がある。

まとめ(答え)

⑭このように、海の生物は、森とたいへん強く結び付いている。森が海の貝や魚を育てているともいえるよう。

基本的に、問題提起をした場合、「問題提起→説明→答え」の順になるが、筆者もその点をふまえて、説明をしている。しかし、この場合、問題提起と説明・答えの関係がすっきりしていない。それは以下のような問題点を抱えているためだと考える。

・問題点1

「どのような役割を果たしているのだろうか」と問題提起しながら、答えの中で「役割」という言葉を用いてまとめていない点。

・問題点2

「役割」は大きく分ければ二つに整理できると考えられるが、説明中、三カ所で「役割」という言葉を用いている点。この場合、⑧段落は、⑩段落の前提であり、他の二つと異なり「海にとっての役割」という問題提起の答えとしては直接的には結びつかない。そのため、三つの「役割」を並列で捉えることはできないと思われるが、読み手には並列した「三つの役割」という誤解を与えかねない表現になっている。

・問題点3

「役割」についての説明が大きく分けると二つであるのに、まとめの部分では「森が海の貝や魚を育てているともいえよう」と「育てる」という表現だけでまとめている点。筆者は「守る」と「育てる」を合わせて「育てる」と表現したと推測できるが、説明との呼応を考えれば、「守る」と「育てる」を用いてまとめるほうが、読み手に対してより親切な表現であると考えられる。

以上のような問題点があるために、「さて、答えはどれとどれなんだろう」という疑問を読者に与えてしまうのではないかと考える。授業の中では、「問題提起に対する答えは何か。いくつあるのか。」という発問をし、考えさせた。始めは「役割」という言葉に反応して「三つ」と答える生徒が多かったが、「本当に三つでいいのか」という授業者のゆさぶりや意見交流の中で、二つにまとめるという案や一つでいいとする案など、様々な意見に分かれた。それぞれの根拠をあわせて発表させた上で、混乱する原因についても考えさせ、授業者が補足をした。その後、この場合、「二つに分けるのが適切であろう」という前提の上で、「それならばどう改善すればよりわかりやすくなるか」という課題について考えさせた。いくつかの方法が考えられるが、今回は⑭段落の初めの一文を、対応を明確にした形で書き直させる活動を取り入れた。ワークシートの中から、生徒の書いたものをいくつかあげておく。

- ・このように、海の生物は、森と大変強く結び付いている。森は、海の生物を守り、育てる役割を果たしているといえよう。
- ・このように、森は海の生物を守り、海の生物を育てるという大切な役割を果たしている。
- ・このように、森は海の生物を守り育てる役割をもっている。そのため失われた漁場がもどってきたのである。このことで海と森が結びついていることがわかる。
- ・海は、「海の生物を守る役割」も「海の生物を育てる役割」も、両方の役割を果たしている大切なものといえる。
- ・このように、海の生物は、森と大変強く結び付いている。つまり、森には、海の生物を守り、育てるという二つの大切な役割があるといえる。
- ・このように、海の生物は、森と大変強く結び付いている。つまり、森は海の生物を守る役割や、海の生物を育てる役割があり、森が海の貝や魚を育てているといえよう。
- ・このように、森は海の生物を守る役割や海の生物を育てる大事な役割がある。このことから、森が海の貝や魚を育てているといえる。

図2 ワークシートの例

一年国語ワークシート 37
一年組 番()

○問題提起と答えの関係をもう一度、確認しておこう。
⑥ 森は、海にとってどのような役割を果たしているのだろうか。

⑦ 掘った腐植土は雨水を地中に保ち、遊葉を地下水として流し続ける役割を果たしている。
⑧ 腐植土を陸地につなぎ留めることで、海の生物を守る役割もっているのである。

⑩ 土砂ーウニ、ニ枚貝、死
コンブ、ワカメ、付着できない

⑪ そのうえ、腐植土そのものには、海の生物を育てる大事な役割がある。

⑫ 植物プランクトン、海藻が増える ↓ 魚が増える

⑬ このように、海の生物は、森とたいへん強く結び付いている。潮が海の日や魚を育てているともいえよう。

○三つのうち、どれが答えなのか。全部？ それとも？
全部理由 全部、森林の役割についてかかれていたから、
どの役割も大事
役割という言葉を
・ ぶんも欠くことができない
・ 一まじまり

○(改善)してみよう。
このように、森林は海の生物を守り、そして、土を育てるという
役割を果たしているのである。

○成果と課題

これまでの実践の中で、「筆者（作者）の意図・工夫」について考えさせる指導は行ってきたが、「問題点」として取り上げたのは今回が初めてであった。そのため、生徒たちも初めはとまどったようである。また、「論理関係のずれ」に気づかせ、改善する活動を取り入れたが、1時間の中では十分に消化しきれない生徒もあった。ワークシートを回収して生徒の実態を把握した上で課題が残ったと判断し、次の時間に補足のプリントを配布し、学習内容の復習をすることで定着を図った。本時を2時間扱いで行う方が、生徒の実態に合わせれば、より適切であったと考えている。課題も残ったが、今回の実践が「どのように表現すればより正確に伝えることができるか」について、考えさせる材料になったと考えている。このような実践を積み重ねることが、『自己の「内的表象」を「相手を意識した」上で、効果的に伝わるよう「工夫をした」情報として発信する力』を育てることにつながるのではないかと考える。「情報を伝える力」に培う授業の実践方法の一つとして、有効ではないかと考えている。

2 第3学年での取り組み

①単元 「読書会をしよう」

②単元設定の理由

昨年度、本校国語科では、中学校読書指導の基本として、次の4点の力をつけることを目標に、読書指導に取り組んできた。

- i 読書習慣をつけることの意義を理解する。
- ii 何を読んでいくことが、自分のもっている課題にあった読書になるか考えられる。
- iii 読んだことによる自分の考え方の変化を自覚できる。
- iv 読んだものの不足した部分を補うために、次に何を読めばよいか考えられる。

この4点ができるようになる指導を行い、生活の中の読みを主体的な姿勢をもつものに変えていくことに取り組んできた。昨年度は、主に説明的文章の読みの指導を中心に行ってきた。それは、日常生活の中での「読む」という行為は、主として対象が説明的文章であるということによる。特に上記 ii と iv を中心に、技能面を伸ばすことに取り組んだ。

その結果、文章を客観的に読む姿勢や、文章を自分なりに価値づけていこうとする姿勢など、読み手として主体的な姿勢が見られるようになってきた。説明的文章を扱う授業の中でいうと、その情報が信じるに足る情報であるかどうかを吟味しようという姿勢がもてたり、その文章の書き手を意識した読みができるようになったりということが表れてきた。

しかし、一步教室から出ると、そういう読みができているかどうか、つまり、教室で見られた主体的な読みが実生活の場で生きてはたらくものになっているかどうかは明らかではない。生活の中で資料を読んで話し合う場面があっても、表層的な読みしかできていないため、話し合いで問題を掘り下げて考えるということができにくく、まわりの雰囲気流されてしまうという実態が目立つ。読みに主体性がなくなってしまうが故に出てきた実態といえる。

そこで、実生活の場面で、説明的文章に限らず、主体性を発揮しながら様々な文章を読んでいけるようにしていく必要があると考えた。今回は、文学作品の読みについて考えていきたい。

文学作品を読んでまわりの人たちと話し合う機会は、多くの生徒にとっては実生活の場ではそう多くはないはずであると思われる。文学作品を読み、読んだことを交流しあう機会を生徒にもってもらいたいと考えた。

また、実生活の場では、自分の読みの質を自己確認することが非常に重要になる。実生活の多くの場では、指導者による読みの質の評価ということが存在しないからである。読みの質を自己確認するためには、周りとのコミュニケーションを通じて自己を見つめることが不可欠である。今回は、ディスカッションを通じて自己の読みを見つめることができるような取り組みを考えていきたい。

本年度、本校では、「表現・コミュニケーション力」を伸ばす取り組みを行っている。これに関して国語科としては、「伝えたいこと」を生徒にどうもたせるか、それをどう表現させ受容させるか、その過程での自己の変化をどう自覚させるか考えていきたい。

③指導目標

1. 今の自分に必要な文学作品はどのようなものかを考えさせ、適切な作品を選んで読むことができるようにさせる。
2. 読んで感じたことや考えたことを、ディスカッションをとおして伝えたり受けとめたりできるようにさせる。
3. 選んで読み、ディスカッションをすることをとおして、自分の読みの質がどう変化したかを意識

できるようにさせる。

④指導計画

1. 自分の課題を決め、それに合った本（文学作品）を探す。…………… 1時間
2. 選んだ本を読み、自分の課題にどうこたえる読書になったかまとめる。…………… 4時間
3. お互いの読みを交流し、他者からあるいは自己から自分自身に返ってきたものをまとめる。
…………… 2時間

⑤学習指導過程

学 習 過 程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1 課題決定 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○課題の探し方を知る。 ○自分の課題案をつくる。 ○自分の課題案と資料をもとに、課題を決める。 ○考えていくための材料となる文学作品を探す。 ○読む作品を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「宇宙を見渡す目」を読んで、指導者が話をする。 ○プライバシーに配慮する。 ○課題一覧表【図3・学習プリント】を配布し、参考にさせる。 ◆追究していくものがはっきりしているか。 ○「読書案内プリント」を配布し、手がかりにさせる。 ○希望を書いて提出させる。 ◆課題にあった本を選んでいるか。
2 作品を読む (4時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○1冊目の本を2時間読む。 読書記録を書く。 ○2冊目に読む本をグループで決める。 ○2冊目の本を2時間読む。 ○読書記録を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○読む本を確認する。【図4】 ○読みきれなかった作品は、授業時間外で読んでおかせ。 ○五行の感想を書かせる。 ◆記録をどのようにとっているか。 ○できるだけメンバー全員のそれぞれの課題に合った本になるように促す。 ○読みきれないときは、貸し出して読ませる。 ○五行の感想を書かせる。 ◆記録をどのようにとっているか。
3 読書会の準備をする (0.5時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○読書会でグループが話し合う準備を個人個人でする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○共通の課題をもって話し合いが進められるよう、各グループごとに課題を与え、考えさせる。 ◆根拠を明らかにしながらまとめているか。
4 読書会をする (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○示された課題について、グループで話し合う。 ○話し合った内容について、グループごとで全体に報告する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ディスカッションの進め方と記録の取り方を確認する。 ○「開いた質問」をするようにさせる。 ◆「開いた質問」ができたか。 ○話し合いの記録をもとに、本の紹介になるような報告を考えさせる。 ○報告を聞きながらメモを取らせ、気づきを発表者に返させる。 ◆紹介内容を聞き取って、後の読書に役立つメモが取れているか。

<p>5 感想文を書く (1時間)</p>	<p>○自分の課題を確認する ○感想文を書く</p> <p>○書いたものを読み合う</p>	<p>○学習プリント1を参考にさせる。 ○課題について自分はどうかを確認させる。 ○課題について本の中ではどうしていたか、それについてどう思うか書かせる。 ◆自分の考え方や生き方を明らかにしているか。 ○感想文集として1冊にまとめる。 ○文章の上手下手ではなく、作品をどうとらえたかに注目して読むようにさせる。</p>
---------------------------	--	---

⑥授業の概要

1 課題設定

今の自分にとっての悩みや考えごとを振り返り、今の自分にとっての課題（生活上の）は何かを考えさせた。

その際、「宇宙を見渡す目」（小平桂一・光村図書「国語3」pp.198～207）を一緒に読み、文章を読むことで生き方や行動の仕方を考えるときのヒントを得ることもできることを話した。

その後、各自が課題としたいことを書いた。

書かれたものを整理して一覧にしたものを配布し、再考させて、自分の課題を決めさせた。【図5】その際の一覧は、プライバシーに配慮して、まとめた形のものを示し、どのように課題を設定すればよいかを中心に据えて考えられるようにした。

その後、各自で課題に合っていると思う本を「読書案内プリント」の中から3冊選ばせた。【図4】

2 作品を読む

○1冊目

1の最後に出された希望をもとに、「課題に合っている本か」「難易度」を配慮しながら、1つの本を3～4人が読むように振り分けを指導者で行った。このグループでディスカッションを行う予定のため、メンバー構成にも配慮した。特に仲のよくないもの同士が同じグループになって話し合いが出来ない状態になってしまわないようにということや、グループの中に発言を独占してしまう生徒が出てこないようにということなどに配慮した。

それぞれの本は人数分を複本で準備して各自に持たせ、2時間読ませた。

読んだ本について、5行で感想をまとめさせた。書くときの視点などは特に定めず、自由な角度から書かせ、書かれていることはできるだけ受容するようにした。

○2冊目

グループで、できるだけそれぞれの課題に合ったもの、1冊目とはなるべく種類の違うもの、という条件で選ばせた。読みたい本が複数グループで重なったときは、グループ同士の交渉で読む本を決定させた。

授業2時間分、読む時間を保障した。

1冊目同様、読んだ本について5行で感想を書かせた。

3 読書会の準備をする

1冊目に読んだもので読書会を行うという原則を知らせ、本を手元に置いてグループでディスカッションを行うことを確認した。

ストラテジー・レッスンとして、「本を読んでディスカッションをすると何かよいことがあるのか」「そのためにはどうしたらよいか」を考えた。生徒は「みんなに分かってもらえる・他人の思考が理解できることで、自分の考えが広がる」ことがディスカッションの意義だと考え、そのためには、「他人のよいところを引き出す質問をする」と「話題を準備しておく」ことが必要であることを確認した。このレッスンでまとめられたことは、その場で紙に書いて掲示し、読書会を行う際にも「原則」として生徒の目に触れるようにしておいた。

グループでの話し合いの準備のため、考えてくる課題を各グループ一つずつ与えて【図6】、個人個人、家庭学習として考えて来るよう話した。この課題は、各作品を読んだ指導者で各作品につき3つずつ準備しておいたものから一つを選んでプリントしたものである。3つから1つを選ぶ際には、生徒の書いた5行の感想を読んで、グループのメンバーの誰も考えていないものをできるだけ選ぶようにした。

2冊目に読んだ本の5行感想に書き込みをしたもの【図7】を、グループ全員分を一枚にして配布し、「質問のしかた」のてびきにかわるものとした。

1冊目に読んだ本の5行感想を一覧にしたものを、各グループで配布して、どんな質問をしたいか考えさせた。一覧を参考に、個人個人でディスカッションに向けて質問を準備した。

4 読書会を行う

グループでディスカッションを行った。話したいという気持ちが高まっているようなので、司会も特に定めず始めることを指示した。グループの数が多く、全部の班で何が語られているか指導者一人で内容を聞き取って評価することが難しいため、最初は3分間話し合ったのち、しばらく記録をとる時間をつくり、記録を残させるようにした。【図8】また、聞いている人が受け身になってしまうのではなく、質問したり、ディスカッションに積極的に参加することを促すため、「質問券」を使った。(各自3枚自分の名前を書いた質問券を持たせ、質問するときはテーブルの真ん中に出してから質問するという約束にした。話し合いが終わったときに出ているカードに番号を打って個人に返し、どんな質問をしたかを書いて提出させた。話し合いの流れが指導者に分かるようにした。)

その後、約5分間、同じようにディスカッションを続けた。

授業の最後に、「この本はどんな人が読むとよいと思うか」をディスカッションして、根拠を示しながらまとめさせた。このまとめをもとにして、作品紹介をさせる予定とした。

「あらすじをまとめる人」「ディスカッションで出てきたことをまとめる人」「『この本はどんな人が読むとよいと思うか』についてまとめる人」というふうに役割を分担して報告の準備をさせる。

記録をもとに、全体に向けてディスカッションの報告をさせることにした。この報告を本の紹介と

して聞かせ、質問や気づきをメモさせた。

ディスカッションの中で自分がどう変化したか、短い文章にまとめさせた。

5 感想文を書く

1で考えた自分の課題をふまえながら書くことを確認する。

課題について、自分はどのようにしているかを中心に書かせる。ついで、読んだ本の中ではどうなっていたか、それについてどう考えるかを書かせる。「感想を書いている」ことを意識させないで、書いているうちに感想文ができあがっているように、課題の設定の仕方とワークシートに工夫をした。

⑦成果と課題

一人ひとりが、自分で選んだ本を1冊読むという形になり、意欲をもって読書に取り組んでいた。

また、自分が読みとったことを交流し合うディスカッションの場では、「伝えたいこと」「聞きたいこと」が一人一つずつはもてていたため、ディスカッションを始める前から話したい、聞きたいという意欲がとても高まっていることが感じられた。

ストラテジー・レッスンの時間をもったことにより、ほぼ全員がディスカッションに目標をもって参加できていた。

このような点では、話したい、表現したいと思うことをもたせることができ、ディスカッションも有意義なものになったと思う。表現の動機となるものをもたせることについては成果が上がったと考える。

課題としていちばん大きなものは、評価である。各グループで深まりのある意見が出たり、鋭い切り口が示されたりが見られた（研究授業参観者の言葉より）ようであるが、指導者が1名では全てを把握することができない。記録を提出させ、質問カードに質問内容を書き込ませる工夫をしたが、それでも漏れてしまうものは多い。レコーダーをグループの数だけ用意して、話し合い時間を短く設定して録音させ、後から指導者が一緒に聞きながら分析したり指導をしたりしていくことが考えられるが、時間・経済的な制約も大きいと思う。また、パネルディスカッションの形にして話し合うグループ・聞くグループに分けることも考えられたが、今回は、読書をして自然な雰囲気です話し合えるディスカッションを目指したため、目標と合致していないということで行わなかった。有効な形での「記録」「分析」のあり方を考えていくことが、これからの課題の第一である。

今回は、初めて1人1冊を読んで、手もとに本を置いてディスカッションを行った。指示されたわけでもないのに自然に本をめくりながら話し合いに参加しようとする生徒の姿は、生き生きとして、表現する喜びを感じているようであった。

今後、系統的な指導ということでは、1・2年生で話し合いを行うときのルールをしっかりとつくっておき、3年生でストラテジー・レッスンの時間を少なくしてこのようなディスカッションを行うことが、「読書会」で十分な意見交換をさせるためには必要であると思う。

また、今回の取り組みに有効な部分があったとすれば、それは複本でテキストを準備できたことによるところが大きい。公共図書館と学校図書館をフル活用しての「複本」であった。各機関の協力をどう得られるか、今後の読書指導を考えていく際には、大きな問題となるように思う。今回協力くださった図書館のみなさんに感謝いたします。

V. おわりに

「情報を読む力」の育成を基盤に据えながら、さらに「情報を伝える力」に培う授業をどのように創造することができるか取り組んできた。日々の取り組みの中から、ここでは具体的に二つの実践を提案した。

第一学年では、テーマ単元を設定し、「筆者の個性や問題点」をより明確にしようとした。特に、「問題点」を改善する活動を取り入れることで、情報を主体的に評価した上で、自らの表現を吟味し「伝える」ことをねらいとした。

第三学年では、まず、実の場で、様々な文章を主体性を発揮しながら読んでいくことができるようにしたいと考えた。読みの質を自己確認させるために、周りとのコミュニケーションを通じて自己を見つめさせる実践をした。

「伝え合う力」が重視され、新しい教科書には表現活動のもととなる教材が多く取り入れられている。「伝え合う力」や「情報を伝える力」、すなわち「表現・コミュニケーション」の場で働く力を育成するために、表現活動の場を増やし、繰り返し経験させることは有効であろう。しかしながら、先に述べたように「表現（話す・書く）する力」すなわち「情報を伝える力」は単独で働く力ではなく、常に送り手と受け手の立場を入れ替えながら、「情報を読む力」と相互に関連し往復しながら育っていく力であると考え。つまりは、まず他者の情報を主体的に評価しながら受け止め、自己を振り返り、それを自らの情報の発信に生かしていくことが重要であると考え。

今年度の取り組みの成果と課題を整理しながら、今後も、「情報を読む力」と「情報を伝える力」をどのように育てていくか、その指導のあり方について考えていきたい。

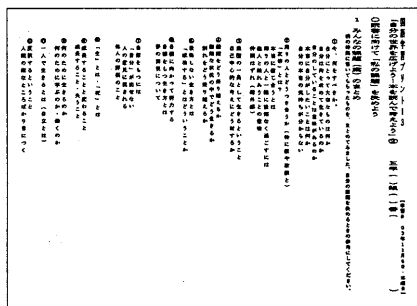


図 3

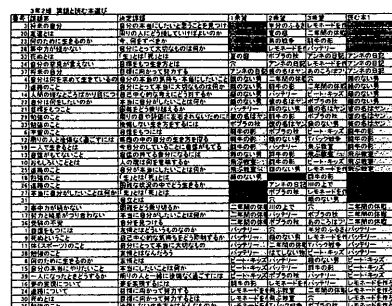


図 4

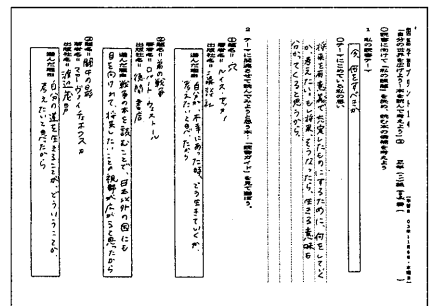


図 5

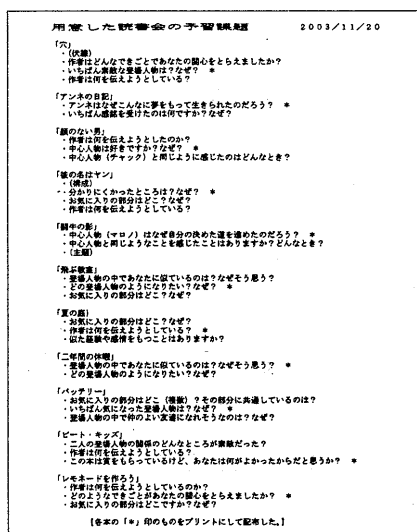


図 6

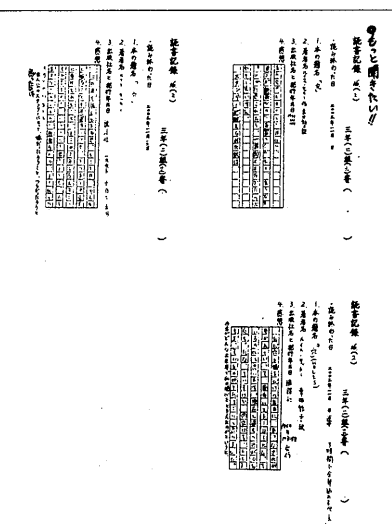


図 7

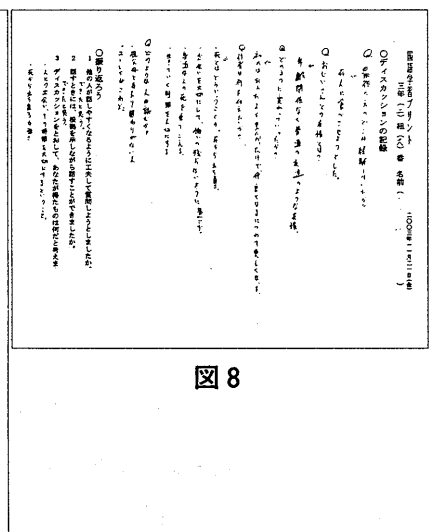


図 8

引用・参考文献

文部省. 中学校学習指導要領. 解説—国語編—. 1999.

文部省. 中学校学習指導要領. 解説—総則編—. 1999.

井上一郎. 『読書力をつける 読書活動のアイデアと実践例 16』. 明治図書. 2002.

大村はま. 『大村はま国語教室 7 読書生活指導の実際 (一)』. 筑摩書房. 1984.

大村はま. 『大村はま国語教室 8 読書生活指導の実際 (二)』. 筑摩書房. 1984.

神宮輝夫. 『ほんとうはこんな本が読みたかった!』. 原書房.

ひろしま子どもの読書活動団体ネットワーク協議会. 『Let's Read 中学生にすすめる 190 冊』. 2002

広島市こども図書館. 『ほんはともだち '02 子どもの心を育てる良書目録』. 2002

三宅将巳. 杉野清隆. 山元隆春「国語科における授業と評価 (1)」. 広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』. 第 35 集. p.13 ~ 24.2002.

Day, Jeni Pollack., Spiegel, Dixie Lee., McLellan, Janet., & Brown, Valerie

B. Moving forward with Literatuer Circles., New York: Scholastic, 2002.

(本書の邦訳はないが, 単元「読書会をしよう」の実践にあたって, 広島大学の山元隆春が個人的に訳したものを参照した。)